芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 38　53. 3

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・辻　英武　編集人・浅田弘明

『倉敷』とまではゆかずとも

―大分県美術の夢―

大分県美術協会長　進　来　哲

「大分県美術の夢」の題材が与えられた。夢は大きい方がよいもの、あれやこれやと夢をふくらませてみたが、夢のうち出来そうな夢と出来そうにない夢もあるし、現在の夢とか、遠い先の夢などもあろう。バクが食いそうな夢を考えるより、出来そうな夢の方がよかろう。

大分県に県立の美術館をと切実に考え、夢みたのが私たちで、その夢の実現をめざしたササイな募金、街頭署名、陳情を繰り返すうち、そのイキサツは兎角、十余年の後、芸術会館が誕生し、念願がかなった。これは私たちだけでなく県民のよろこびでもあろう。文化果つる所などいわれた昔から考えるとうれしいことである。これも私たちが描いた第一の夢の実現である。

石　仏

県芸振会議理事
県美協事務局長　仲町謙吉

次にえがく美術の夢も数あるが、一応待望の芸術会館は出来て、当事者は極力、その運営に力をいれて、優秀な作品の蒐集から企画事業の計画はこよなく有難い。遠く東京、京都とか、福岡まで足をはこばず良い作品に接しられる。文化振興にどれほど役立つであろうか。不況不況と私たちをいらだたせる昨今、絵画とか、音楽、演劇とかの文化がしたしまれ、心が洗われ更に情操をたかめることは、ことに必要であると思う。

しかし、芸術会館には公館的な性格があり、見えない垣根を感ずることがある。さらにＰＲ不足もあろうが、荒地にポツンと出来た、お城のようで、とっつきわるい。何れ公園も出来ると聞いているが、此の公館を中心として親しめる文化センター地区に発展してもらいたい。市立図書館もよかろうし、いろんなサークルの研修出来る施設もほしい。此の地区に来ると、文化的なフンイキに一日中ひたることが出来ると、しぜん芸術会館も親しまれ、利用価値も倍増しよう。犬の散歩地となっては甚だおさみしい。それが心配である。此の夢など野放図で実現不可能な夢でもなさそうである。

倉敷は、工場と倉庫が少しある古い街で、あれほど有名になったのは大原美術館である。多くの観光客は美術館の名作が目あてである。倉敷とまではゆかずとも、大分県の芸術会館にゆけばこういう物が見られる、という特色のあるものになれば、美術家だけでなく、一般の人にもよろこばれ、誇りでもあろう。まだ夢は夢をよぶが、出来そうな夢を一つかいてみた。

大分県美術の夢（ゆめ）

競い合おう若き美術家たち

岡　崎　健　治
独立美術会友・県美協会員（洋画）

活気があり魅力的なコンクール展として、先月第１回北九州絵画ビエンナーレ展が開かれた。これは、北九州市制15周年と北九州市立美術館３周年を記念して発足し、地元の美術文化向上と発展とを併せ、さらに国際的な視野で公募したものである。特に刺激的だったのは、第１席賞金100万円（買上げ賞を含む・１本）総合賞金額 260万円である。この賞には市、地元産業界の自発的な提供があり賞の本数も多くなったと言われている。海外からも出品者があり、大分県からは、井上佐之助・後藤竜二・谷口晶之の各氏や私も出品し入選、賞にはならなかったが各氏とも力量十分で決して他にみおとりのしない力作であった。審査員も一流で画家の糸園氏、評論家の東野氏など５氏があたり、熱気あふれる会場になっていた。北九州市市長のあいさつの中で隔年ごと内容充実していきたいといっていた。またこの展覧会に似た公募展として鹿児島県の南日本美術展がある。もう20年余りの歴史をもつが現在なお活気にみち刺激的である。これには後援の美術振興を高揚するため故海老原喜之助氏が提唱してもうけられたというパリ留学賞がある。第１席になった人を隔年に３ケ月間研修させるというもので、すでに９名の人が留学している。私の学友も鹿児島市で教べんとりながら次回の候補として有力視されている。留学費用は、地元の産業界や医師などがさまざまなかたちで融資している。そのかわり作品１点寄贈というものである。大分県の場合はどうであろうか、芸術会館記念として、昨年の大分県美術展ではＯＧ賞がもうけられた。これは大変励みになるし、すばらしい事だと思う。できたら買上げ賞をもうけ、もっと魅力あふれるものにしてほしい。なにも決して賞金、留学制度がなければりっぱな展覧会ではないとは勿論思ってはいないが、多くの若い美術家たちにとってはやはり土俵が大きければ大きいほど、また舞台が広ければ広いほど、それだけ意気込みがちがうし、意欲の燃やし方がちがうのも当然だと思う。要は意欲にみちた若い美術家たちが競い合う自己研さんの場が設定され質の高い展覧会が出来ればよいわけである。そういう意味で大分県の美術が今後どのように変貌するかは、私たち美術関係者や文化面に携わる諸氏にとって大きな責任と自覚の如何にかかっている。

[redacted]

芸館活動をバネにして

二　宮　玲　子
県美協会員（日本画）

大分にかぎらず、地方では日本画が洋画にくらべて描く人口がすくなく、そのうえ、一般の日本画に対する理解度も大変うすいように感じられる。花鳥画だけが、あるいは、南画的な絵画だけが日本画だと思っている人々が、私達の予想よりはるかに多いことはたしかである。時々こんな質問をうける。「これも日本画ですか」「この絵は洋画とどこがちがいますか」等々。日本画人口が少ないということは、初心者が入門するには、材料や技法にも大きな抵抗があることもたしかだが、日本画的な刺激が薄いところも大きな原因があるのではないだろうか。私も刺激をもとめて中央に展覧会を年に何回か見にでかける。その時は背筋がまっすぐにのびる思いがして、「やろう」とはりきるのだが、帰って、毎日の仕事におわれだすと、その感激もいつしか消失し、日一日と背中がまるくなっていくのをつくづく感じるのである。地方の低調さに甘えがでてくるのだろうか。

さいわい、今度大分には芸術会館ができ、どんな展覧会を鑑賞することも可能になってきた。この会館のすばらしい設備を活用し、中央のすぐれた日本画の展覧会が、数多く催されることができたならば、日本画をこころざす私たちにとっては、すばらしい勉強の場ができるとともに、地元の方々もいっそうするどい鑑賞眼をもたれるだろうし、活気ある、大分の日本画界ができるのではないだろうか。

[redacted]

春一番の吹き過ぎた今朝の鶴見岳は嘘のように静かだ。旬日前の雪はもちろん、数日前の霧氷も消えて、山肌は乾草色でまぶしい。

観光港に着いた九年前の二月の朝は、船旅の名残りもあり、鶴見おろしの寒風が肌にしみた。船底から鞍ケ戸にかけての凍てついた雪を見上げながら、これが由布岳だなと感じ入ったのを憶えている。私の大分県についての知識はあきれる程おさないものであったが、それでも朝倉文夫の名前と臼杵の石仏群や熊野の磨崖仏の存在は知っていた。

この大分は音楽も演劇も工芸も、そして美術もいたって盛んであり、いわゆる芸術人口も多く、それぞれのレベルも高い。しかし、こと彫刻に関しては、残念ながらこの論はあてはまらないように思う。なぜだろうか。彫刻が他の芸術と比較して仕事に必要な場所や用具が面倒だからだろうか。建物や広場に適当な彫刻空間がないからだろうか。しかし、これは答の一部分でしかない。

自然と彫刻

県美協会員（彫刻）　合田習一

都会の人工化された小さな自然の中で彫刻は雑踏のオアシスの目印として慎ましくその存在を主張している。私は野外に置かれた彫刻の効用の一つをこのように考えていた。

大分の自然は優しい。山は人間を威圧するほどに大きくはなく、その四季の移り変わりはすばらしく美しい。海は朝夕の天候にあわせて七色に変化する。人々は彫刻に何を求めるだろうか。私には彫刻の制作すら忘れさせる魔力が潜んでいるように思えてならない。

しかしながら、この風土からしか生まれ得ないものを捜すために私達は土をこね、木をけずり、石をたたくことから始めねばならぬ。この地方性を踏まえながら、しかもどこまでもローカルでない発言力をもった作品をつくりだすために。

[redacted]

臨書に燃え創作に開花させよ

荒　金　幽　岳

創玄書道会審査員・県美協会員（書道）

大分県の書芸術も全国レベル以上の成果を収めていることを度々聞きます。

「創作」の必要性を私も説き、努力を重ねてきましたが「お手本」というものが、旧態依然と存在している限り、たとえ全国的水準以上に達したとしても将来芸術での書道の保証は得られないと思っています。

自分の力をぶっつけ、独自の創作への活動を始めなければならないと思っています。

創作はよく難しいと言われ、「創作」の言葉が常に霞のむこうに奉られ、ますます難しいもののように考えられています。しかし、日展等で受賞するような作品だけが素晴らしいものではないはずで、幼児のちょっとした雑書きも心打つことがあります。とするならば創作も身近なものに感じられてくるのではないでしょうか。

私がここ一年別府のある幼稚園で児童画に対する児童書について研究してまいりましたが、子供は楽しく筆をとり自由にのびのびと書きます。

幼児の時は自由に筆を持ち書けるのに小学校・中学校・高校・大人となるにつれて創作というより手本があって当然と思っている。その姿にどうしても理解の出来ない一面を感じます。

その問題は一つに、

小・中学校書写教育の問題であり、

高校芸術科教育の問題でもあり、

書の一般的な伝統から出る影響でもあります。

若い人達が、燃える作品に目をむけ、古典の学習に時間をついやし、もっと遠い未来をみつめたいものです。

私達が、大分県書道美術の将来に大きな夢を描く時、漢字作品・かな作品・近代詩文書作品・少字数作品・刻字篆刻・前衛書作品にかたよらず、書について語りあい、古典の臨書に燃えに燃え、創作で書の花を咲かせたいものであります。

[redacted]

写真のルーツともいえる初期のタゲレオタイプのカメラが長崎に入って百数十年たち、機材もかなり進歩した。

とりわけ露出、焦点合せの自動化などは初心者にも簡単に写せるようになった。

この様に機能、価格の大衆化により写真人口も大幅に増加の一途をたどっている。

これからの大分県写壇の課題はこれら増えてくる写真愛好家をいかに指導し、育てるかということであろう。例えば県美展などはすごい熱気を感じるのだが、それは年に一度のフェスティバルとしての熱気であって継続されたものであるとは限らないのが現状のようだ。作者は発想を暖め前向きの態度で創作にはげまねばならないだろう。

最近、中央地方を問わず以前嫌われていた絵画的表現が一部に復活して来ているようだ。これも中央写真界が混迷している一つのバロメーターだと思うが、地方在住者は中央の動向や安易なジャーナリズムに惑わされず己れの信ずる道を究めるべきだろう。

もう一つの課題は一般に写真を浸透させることである。大分は写真展が少ないし、入場者も少ない。まだ記念写真的な感覚しかもっていない人々が多い。美術的評価のしにくい面があり困難な問題であると思うが、どしどし完成度の高い良質の作品を発表し、良さを理解してもらう事が肝要である。

日本は低成長時代に入り、週休二日制が定着するようになると、ギャンブルやゴロ寝には飽き足らなくなり、かといってお金のかかるレジャーは無理となる。自分の専門以外の「専門」も持ち、掘りさげる事がよりクリエティブな生き方になるのではないか。

幸いにして立派な芸術会館もでき、優秀な作家も多いので地方中央を問わず作家の方々は作品を発表し県全体のレベルアップに努めるべきだろう。

クリエティブな生き方を

県美協会員（写真）　芦刈博美

感動の頂点を作品に

森　秀輔
大分二科会員・県美協会員（写真）

「芸振」の原稿を依頼されました時、私は大変にとまどいを感じました。しかし日常の事柄を書きとどめたいと思いなおしました。私は自分の生活環境の中から撮ったり、休日を利用して遠隔地までかけたり、また特定のテーマにとり組んだり、さまざまな状況の中から撮り続けています。しかし、それが、どのように芸術文化と関連しているのか、その意義と目標がはっきりしないままに過しています。やはり写真に対する考え方で、自己の確立がはっきりできていないからなのでしょうか。趣味の域を脱していないからなのでしょうか。しかし、この情熱は今日の私の生活リズムとして完全に溶け込んで回転しています。何か一つのものを創りだす場合、やはり感動がなければできません。自然のおりなす現象、摂理、生物のいとなみ、それらと人間とのかかわりが美としての感動にまで高まった時、自分が生きているよろこびを感じ、創作の意欲となるのであろうと思います。

創りだせば、そこでコミュニケーションの場が必要となってきます。県芸術会館が設立された事は、県民として喜ばしいことだと思いますし、ますますより多くの素晴らしい作品が機会を多くして展示されることを期待しています。この芸術会館を中心核として、その他の市町村にも芸術会館をより多く建設し、それを地方核としてサイクルを組織し、地方文化を保存育成しながら、広域かつ高度な文化を未来に向かって育てることが必要であろうかと思います。そのことで県民の理解と芸術文化の一そうの発展が得られ、底辺の拡大ができるものと思います。大分県の芸術の歴史は古く深いものがありますが、それが今日的に広く開かれた県民の芸術文化として育成されていくことを願っています。

制作の夢は過程の中から

佐　藤　邦　生
大宣美会員（デザイン）

仕事としてのデザインを初めて6年、27歳というのは中途半端な（私の）時代です。まともな物を仕上げるには未熟な腕だし、かと言って情熱にまかせて、がむしゃらにやるには、多少の冷静さが身について来た様です。どっちつかずの誠に不安定な時期なのです。

こんな時に、ある日突然「私にとってデザインとは何であるか」こんな事を考えてみたのですが……。私の貧弱な脳みそでは結論なんぞ出せるわけがなく、私のまわりを雲か霞か、ただよっているばかりです。そこで、ちょっと離れて、今までの作品をながめてみる事にしました。すると、しだいに輪郭が浮かんで来るのです。しかし、その中には期待した物はなく、支離滅裂で、いいかげんな自己満足の手づくり遊びでしかない物ばかりで、気分はしだいに重くなりました。ところが、うれしいことに、ひとつだけみつかったのです。結果としての作品には救いはなくても、過程の中にあったのです。アイデアを練り、レイアウトを決め、コピーを考え、イラストを仕上げ、フィニッシュにもちこむ、この作業を進める、ひとつ、ひとつの行程が、私を楽しませてくれると言う、ありがたい事が。まるでジグソーパズルで、ひとつの紙片をおくごとに、隠された物が、ハッキリ見えてくる様な、ひそかな喜びなのです。しかも、これは、やればやるほどに深みを増し、私をワクワクさせます。もちろんこの中には、それと同時に苦しみもあります。しかし、このふたつは表裏一体で、どちらが欠けてもそれは存在しなくなる様です。

今、中途半端な私なのですが、この楽しさを味わえる限りは、続けられそうです。しかし、不安はあります。逆に考えれば、中途半端なこの時期だからこそ、この楽しさがあるのかもしれないからです。この楽しさは、がむしゃらな時代にはありませんでした。この先の安定の時代に入った時に、この楽しさを持続できるのか、今の私にはわからないのです。（[redacted]

三才児の夢と私

県美協常任委員（工芸）　若林董子

㈠　三才児美術の夢。「ママ大変来て見て」、「何よ、今いそがしいのよ」と言いながらベランダに出た、「ホーラお空がピンクよ」とさも不思議な色を発見した如く三才児坊やは夕焼の黄金色でないピンク空を母に教え満足顔、岩田町に住むこの三才児が大分県立芸術会館記念行事の一番手千年展を見に母について行った。あきるだろうと思ったが結構質問したり、率直に感想を表現したり次々と目を見はっていた。朝倉さんの彫刻の前であのおじちゃんは着物を着てるに、このお兄さんお姉さんはどうしてパンツも穿かないのとおかしいの連発。ママはフフと言葉につまった。周囲の人も坊やの率直な表現につられ笑った。墓守、若き日のかげ、時の流れがお気に召したらしい。また宇治山さんの絵「想」の前に来た時大声で「あ、僕の吹いたシャンボン玉を書いている」。きれいに書かれた赤や青の丸の大小が三才児の目にはそううつった。また木造天立像の仏像の前で之を女性像に捉えたらしく「ママ、このおばちゃんどれよりやさしいお顔をしてるね」とたんねんに太郎像を眺めていた。見せても解るまいと思ったのは大人の考えで良い物を見せるとそれなりの捉え方をするものだと、三才児坊やの美術につながる将来の夢を信じ育てなければと思った。

㈡　美術へのささやかな夢。美しい物を染めてみたい。最近ラックダイというインドやペルシャに産する大樹の木につく虫から取る天然の色、昔文化文政の頃の更沙記録や江戸初期の加賀友禅の古い物にあったが最近去る二月から東京の染料店に輸入品が出た。ピンク染めとしてはむずかしい発色であるが、コチニールや紅花、すおうのピンクより魅力がある。よりよき色、そして新しい表現をする時古い物を知りそれを現代科学で証明出来たら理想的。同じ色でも化学染料で染めた布を天然染料のと比較するとき十人が十人まで天然のを好むという。それは天然染料の波長がなだらかで目を刺戟しにくい為という科学証明がなされた。魅力ある色を出す夢をいつまでも追いたい。[redacted]

増やしたい日本画人口

露　木　恵　子
県美協委員（日本画）

今日、一般的現象となっている洋画人口の優勢に対する日本画人口の激減は、大分県だけの問題ではなく、全国的な傾向であろう。

日本画が主流であった我国に於て洋画が教え始められたのは、英人ワーグマンによってで、横浜で1866年（慶応2年）のことであった。また明治15年には国内絵画共進会で油絵出品禁止等の洋画排斥運動などもあったが、洋画は一般に広く浸透し、今日の隆盛を迎え、日本画は斜陽の一途を辿って来たといえよう。

日本で西洋絵具製造販売が開始されたのは、明治12年でその後、洋画材料は改良、開発によって飛躍的な進歩が見られ、最も身近な表現材料となった。一方、日本画の専門材料店は、現在、東京で数軒、他に金沢、京都、福岡に数軒あるだけの状態で、ようやく、最近になって、岩絵具・顔料等をセットにしたものが近在の画材店でも入取し易くなり、日本画人口が再び増えつつあるように思われる。

私は油絵の方が身近なものであったが、日本画の肌合いが向いていると考えて、その追求をするようになって、15年程になるが、西欧美術への関心が強く、日本画、洋画と固定的観念で分けるのを好まない。両画とも、各時代で各様式・技法の隆盛、衰退の波をくぐって今日に至ったものであり、その伝統を基盤に写真・印刷・その他工学的な技法等との結合融合による新しい表現の追求が積極的になされている。

大分県に於ても日本画に関心を持つ人が確実に増えて居り、その活動も盛んになって来ているので、現代に於ける日本画の意味を問い、新しい表現の開拓がなされる原動力が生れて来るのではなかろうか。

[redacted]

心にひびく書

（書美術振興会委員
県美協会員（書道））　松　岡　小　壽

私と書との出会いは、南鮮木浦高女の一年の時でした。初めてのお清書を大変ほめられたうえ、「習いに来ないか。」といわれて、一時間もの道のりを四年間通いつめたことでしょうか。上級学校に進んだり、帰国したりで、その先生（書道芸術院のかなのK先生）とは、その後お逢いする機会もありませんが、私が未だに「かな書道」にこうしてかかわっている所以でございましょう。

「大字かな」を始めるようになり、締切日が迫っても思うように作品が書けなくて、どうしようもない時には、筆からも墨の香りからものがれるようにふっと庭にでます。そして裏山へと散策していてふと足もとの「蕗のとう」の浅黄色が、くたびれた私の心をなごませ書作への意欲を湧かせます。自然とは有難いもの、それから気分をかえて、古典の「目習い」をします。書きづらい字を全部抜粋して書いてみます。

「作品には年齢も性別も有りません。忙しかったとか！　体の具合が悪かったとか！言いわけの付箋はつけられない。佳い作品を書くこと」と、吾が師（中村龍石先生）は申します。「かな書道」は世界唯一のものですから誇りをもって、下手でもいい、心にひびいてくるような書が書けたらと夢想しています。

「目習い」といえば、先月故宮博物館で数々の逸品の中から、多くの先達の真筆に接しました。遠い古へから現代に至る、時代を越えて胸うつ感動の波は素晴らしいものだと感じました。と同時に、そこに行けばいつでも真筆に学び、真筆の心にふれることが出来る彼の地の人々が心から羨しく思いました。

大分にも立派な県立芸術会館が出来て、県ゆかりの方々の美術作品が集められています。書の方もどうぞ充実して頂きたいと思います。福田展、朝倉展に位するものが、書の分野にも〇〇展として出来たら喜ばしいと思いますし、底辺の広がりと共に書学を志すものの励みとなるのではないでしょうか。

[redacted]

強烈な個性の新人を望む

二紀会同人
県美協会員(洋画)　古川　栄

新しい天才画家がほしい。何といっても天才画家が道を開くものである。レンブラント然り、ゴーギャン然り、ピカソ然り、ダリ然りである。大分県も絵画人口は増えて来て若い人も絵をかく人が多くなった。佐伯の方もで絵画人口は益々増えてゆく。しかし現在大分県の画家達は皆小粒になってしまった。新人が現われても長続きがせず、すぐ消えてしまう。なぜか、それはすぐ売ることを考えるからではあるまいか、商業主義に走り、ジャーナリズムに迎合するようである。ジャーナリズムや批評家を相手にしない強烈な個性をもった新人が現われることが夢である。そうはいってもただ仙人のように孤独な修練でも限界がある。以前スバル会があって革命的といえる程の刺戟的活動を行ない、大分県美術に活力を入れたものである。その作家達も未だ若さを持って活躍はしているが、スバル会の如き前衛的（心理的ではあるが）心意気を持ったグループが誕生して、芸術会館で大発表会をやるべきである。今大分県の洋画部門には天才もなければ、生き生きしたことを主張するグループもなく、小粒で、平均化してしまっている。天才画家が現われて大分県の洋画部門に活を入れてほしい。そういう画家を育てるよう芸術会館も力を貸してほしい。

[redacted]

先輩作家展とその保存を

伊　福　啓　男
県美協会員（写真）

県民待望の芸術会館が完成し、喜びにたえません。又その後の運営も素晴らしく、大分県に居ながらにして日本の又世界の美に出逢うことが出来る幸せを感じています。その芸術会館に完璧な収蔵設備が有り、その収蔵第一号に県展（写真の部）の最高賞受賞作品が選ばれた事は、大変嬉しく思いました。

思えば19世紀末、長崎で上野彦馬が写真術を修得し、日本中に広めた事は、あまりにも有名ですが、その彦馬が写真に出逢う数年前に日田市の淡窓の門を叩いて、咸宜園に３年間学んでいるのです。大分県には、写真の原点から、かかわりがあった様に思われます。

私が、写真の魅力にとりつかれたのは、20年位前、地方新聞に連載された県出身の写真家・長野重一氏の「ベルリン西と東と」を見た時からでした。正に写真の真骨頂を見た思いでした。又、六郷満山を永年を費やして写した大崎聡明氏の「八幡文化の秘宝」には故郷をこよなく愛す県人の心と美を追究する写真家の厳しさを教えられました。

私の、大分県美術の夢は、大分県の生んだ偉大な写真家の二人展をオリジナルプリントで見れないものかと思うのです。そして、貴重な作品が完全な形で保存されることを希望します。必ずや21世紀の県民文化に寄与する事と思います。

[redacted]

かわの眼科

河野　彰

大分市府内町２丁目５－９（トキハ北口通り）

ＴＥＬ　大分（0975）32－2480
36－7547

文化ニュース

◎第９回九州芸術祭九州グラフィックデザイン展

会場難のため、このところ３年ほど本県で開催できなかった九州グラフィックデザイン展が、久しぶりに大分で開かれた。

主催　九州文化協会、大分県教育委員会、大分県宣伝美術協会ほか

後援　県芸術文化振興会議ほか、会場は県立芸術会館で、１月11日から19日までの９日間行われ、作品は全部で150点程度。好評であった。

なお、今回の展覧会において、大分県関係では次の２氏が受賞した。

大分県知事賞　　天野ともお（大分市）
鹿児島県知事賞　佐野　邦生（大分市）

◎江口章子歌碑建立と記念誌「章子」刊行

西国東郡香々地町の旧家に生れ、北原白秋の妻となり無名時代の白秋を支え、みずからも多くの詩歌を残した〃薄幸の詩人〃江口章子（あやこ）の歌碑が去る２月26日、同町長崎鼻に建てられた。

碑は高さ２メートル、幅3.5メートルの自然石で「ふるさとの香々地にかへり泣かむものか、生れし砂に顔はあてつつ」が刻まれている。歌碑は建立世話人会（代表土谷斉）が広く募金し、百数十万円が寄せられて実現した。またこれを記念して、章子の作品抄を中心とした「章子」（Ａ５版70ページ・松見時也構成）が刊行された。

なお、今秋の県芸術祭に江口章子を題材とした演劇の上演が予定されている。

◎３月６日(月)
九州文化協会・九州芸術祭実行委員会
最優秀作　「ジョージが射殺した猪」
又吉栄喜　沖縄県

大分県からは、地区入選作品として、古岡孝信氏（中津市）の「土からのメッセージ」が受賞した。

なお、作品の応募数は九州全地区の計210編、その中大分県からは22編であった。

贈呈式のあと、九州文化協会事務局において、実行委員会が開かれ、昭和53年度の事業の企画のあり方について意見交換がなされた。

◎３月７日(火)～26日(日)
大分県立芸術会館新収品展
近世・近代作品展　県立芸術会館

◎３月６日(月)～10日(金)
地方文化施設職員研修会　主催文化庁　国立劇場において音響を中心に濃密な研修が行われた。本県からは、県立芸術会館学芸二課の長浜博研究員が出席。

◎３月22日(水)
大分県音楽協会記念演奏会　　於　県立芸術会館
弦楽合奏　ヴィヴァルデイ四季より「春」等を演奏

◎３月31日(金)
現代舞踊協会九州支部　ジュニア・新人バレエフェスティバル　　主催　（社）現代舞踊協会九州支部
於　県立芸術会館

◎５月23日(火)～28日(日)
春季県美展
日本画・洋画・彫刻・工芸展　会場　県立芸術会館
搬入５月21日、１人１点20号以上制限なし、無審査、一般にのみ奨励賞10点。

編集後記

「芸振」31号（51.６)から始まった「大分県芸術文化の夢をえがく」もこの美術特集号で終わる。今回は52年県美展の各部門受賞者のなかから執筆をお願いした。しかし原稿未着の分があって多少バランスを欠いたウラミもあるがご容赦を願いたい。

会報「芸振」も45年の創刊より８年38号を数えるがいささかマンネリの感あり、編集者の刷新をはかって会員各位に資することをお願いしたい。（Ｆ）